

## 〈論文〉

# フェルディナント・グリムと古城の幽霊伝説 —ハインリヒ・フォン・クライストの「ロカルノの女乞食」 を通して—

Ferdinand Grimm and Ghost story in the old castle  
- Heinrich von Kleist's "Das Bettelweib von Locarno"-

馬場 綾香

BABA Ayaka

## 概要

「ロカルノの女乞食」(初出 1810) はハインリヒ・フォン・クライストによる短編小説であるが、グリム兄弟(ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリム)の『子どもと家庭のメルヒェン集』(1812-57)に収録された類話「乞食ばあさん」(KHM150)への神話学的解釈を援用して伝承文学の系譜に基づいた読解がなされてきた。作家による作品と民間伝承との境界の不確かさは現在もなお議論を要する問題である。本稿ではヤーコプとヴィルヘルムの弟フェルディナント・グリムが『ドイツ及び諸外国の民間伝説とメルヒェン』(1820)に「ロカルノの女乞食」を民間伝承として収録したことについてその背景を含めて述べ、『子どもと家庭のメルヒェン集』における「乞食ばあさん」との違いについて論じる。フェルディナントの伝承集においてはグリム兄弟による神話学・伝承文学研究の知見を踏まえつつも、グリム兄弟とは異なる「伝説」としての価値が見出されていることを明らかにする。

## Key Words

Ferdinand Grimm, Sage, Märchen, Heinrich von Kleist, Das Bettelweib von Locarno

## I はじめに

「ロカルノの女乞食」<sup>1</sup> Das Bettelweib von Locarno (初出 1810) は作家ハインリヒ・フォン・クライスト Heinrich von Kleist (1771-1811) による短編小説である。1810 年 10 月の『ベルリント刊新聞』Berliner Abendblätter 第 11 号に匿名 (mz というイニシャル) で発表され、翌 1811 年にクライストの作品集第 2 巻『物語集』Erzählung に収録された。「掌編小説」Kurzgeschichte という形式のはしりとして、また文学におけるロマン主義の高まりと共に隆盛する怪奇小説というジャンルの初期の名作として、当時から高い評価を得ている。

1 本稿には「物乞い」や「乞食」といった差別的と取れる表現が含まれるが、作品の歴史性に鑑み原著及び参考文献に則して用いることとする。

同作は作家による小説作品であり民間伝承ではない。しかし一方で、伝承文学研究の文脈を踏まえた読解がなされてきた。本論文では、同作を伝承文学の視座から評価した同時代人であるグリム兄弟とフェルディナント・グリムの扱いについて論じる。ひいては、「民間伝承」とは何かという問い、その概念史に迫るものである。

## II クライスト「ロカルノの女乞食」とその文学的評価について

### 2.1 「ロカルノの女乞食」

クライストの「ロカルノの女乞食」は、イタリア北部（現イタリア語圏スイス）の古城を舞台とする幽霊譚である。あらすじをまとめると、まず城主である侯爵の留守中、物乞いに現れた老婆を奥方が城内の一室に通し、藁を敷いて寝かせてやっていた。帰宅した侯爵はこれを不快に思い暖炉の裏に退くよう命じた。老婆は移動の際に転倒し、これが元で死亡する。数年後、侯爵は困窮のため城を売却しようとするが、幽霊騒ぎのために買い手が見つからない。自身の目で確かめてやろうと件の一室で夜を明かした侯爵夫妻は、あの老いた女乞食の幽霊に遭遇してしまう。恐怖で気のふれた侯爵は城に火を放って死ぬという結末である。

当時の版組で4ページ分、現在出ているクライスト全集でもB5版3ページほどの短い作品である<sup>2</sup>。クライストは特に短編の名手と言われる。岩波文庫版の翻訳者の相良守峯は解説において「彼の叙述は当該の事件そのものに強力に集中され、付随的な事柄や装飾的描写には一言半句も費やされていない。自然描写、性格描写、心理描写、情景描写などには極度に筆を惜しみ、もっぱら事件や行動それ自体の叙述に専心する<sup>3</sup>」と評している。細やかな描写を避け出来事や人物の行動を次々と述べて話を進める作風は他の作品にも共通するクライストの特色とされる。

一方で、文体が簡明とは言い難いこともまたクライスト作品の特徴である。相良が「間接話法や対結文や附結文が無限につらなり、その長い複合文がいつ果てるとも知らないほどのものである<sup>4</sup>」と述べるように、副文を多用した長文が基本となり、一文の中に複数の情報が詰め込まれる傾向にある。たとえば次に示す本文第二段落は、第一段落で老婆が亡くなった後、初めて幽霊が出現する場面である。

Mehrere Jahre nachher, da der Marchese, durch Krieg und Mißwachs, in bedenkliche Vermögensumstände gerathen war, fand sich ein florentinischer Ritter bei ihm ein, der das Schloß, seiner schönen Lage wegen, kaufen wollte. Der Marchese, dem viel an dem Handel gelegen war, gab seiner Frau auf, den Fremden in dem obenerwähnten, leerstehenden Zimmer, das sehr schön und prächtig eingerichtet war, unterzubringen. Aber wie betreten war das Ehepaar, als der Ritter mitten in der Nacht, verstört und bleich, zu ihnen herunter kam, hoch und theuer

2 Heinrich von Kleists sämtliche Werke. 4. Teil. Erzählungen. Vermischte Schriften. Hrsg. von Theophil Zolling. Deutsche National-Literatur. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. 150. Bd. 2. Abteilung. Tokyo (Sansyusya), 1974. S. 190-192. 以下、同全集はHKと略す。

3 クライスト(相良守峯訳):O侯爵夫人 他六編(岩波書店)2016,255頁。原文の旧字体は引用者の判断により改めた。

4 相良、同上。対結文(Satzverbindung)は並列の接続詞によって主文と主文を結合した文、附結文(Satzgefüge)は従属の接続詞によって結合された主文と副文からなる複合文を指す。櫻井和一:ドイツ廣文典(第三書房)昭和25,328-329頁。

versichernd, daß es in dem Zimmer spuke, indem etwas, das dem Blick unsicher gewesen, mit einem Geräusch, als ob es auf Stroh gelegen, im Zimmerwinkel aufgestanden, mit vernehmlichen Schritten, langsam und gebrechlich, quer über das Zimmer gegangen, und hinter dem Ofen, unter Stöhnen und Aechzen, niedergesunken sei. [HK, S. 190]

この段落全体が僅か3文からなり、侯爵が城を売りに出したこと、最初の購入希望者が現れ城に泊まったこと、そして幽霊に遭遇したことが一段落でまとめて述べられる。これをできる限り原文に忠実に訳すと次のようになる。

数年の後、この侯爵<sup>5</sup>が戦争と不作によって憂慮すべき資産状況に陥った時、ひとりのフィレンツェの騎士が彼のところに現れたのだが、この騎士はこの城をその素晴らしい立地のために彼から買い取りたいと考えていた。侯爵は、この商談に重きを置いていたので、夫人に命じて、客人を上に乗せた、あの空いている部屋、綺麗に飾りつけがしてある部屋に、泊めさせた。しかし侯爵夫妻は如何にうろたえたことか、その夜更け、件の騎士が青ざめ狼狽して侯爵夫妻のもとを訪れ、あの部屋にはお化けが出るのです、と強く確かに断言した時、彼によると、何か目に見えないものが、まるで藁の上を這っているような物音をたて、部屋の隅から立ち上がって、はっきりと聞き取れる足音と共に、ゆっくり弱々しく、部屋を斜めに横切って、それから暖炉の後ろに、呻き声を上げながら、倒れ込んでいった、とのことだった。

従属の接続詞を用いた副文と関係代名詞による副文が一文の中に入っており、またコンマを多用して語句を並べる特徴がある。こうした特性のためドイツではクライスト作品がしばしば国語教育の教材に使われるが、日本語としては読みにくく煩雑になりやすいため文を適宜切って訳されることが多い。相良訳ではこれを二段落6文に切っている<sup>6</sup>。しかし、一文は長いものの述べられている内容は単純であり、出来事の推移と登場人物の行動、そして幽霊の動作が端的に提示される。

実在の土地を舞台とするこの小説は、クライストが知人から聞いた体験談を種としている。ジーグスムント・ラーマーが明らかにしたところによると、クライストの友人エルンスト・プフェルのアーカイブにこのようなメモが残っている。「ロカルノの女乞食はエルンストの兄のとある冒険のおかげで誕生した。ある種のお化け話 (Spuckgeschichte) だが、彼がギールスドルフの伯父のところに行った時、プフェル騎士団長に起こった話だ」。ラーマーによるとこの体験談の実際の内容は不明だが、小説発表の時期にクライストがエルンストやその兄フリードリヒと青年期の思い出や冒険話などを文通していたことは確かだ<sup>7</sup>という。

5 マルケーゼ Marchese はイタリアの爵位のひとつ。本稿では先例に従い侯爵と訳す。

6 クライスト (相良訳) 2016、160-161 頁。日独バイリンガル作家の多和田葉子は森鷗外がクライスト作品を歯切れの良い日本語に訳したことを「クライストの文章は副文が多く、しかもその副文が情報を追加するという役割をはみ出して、勝手ににきよと生えていく。そこがクライストの魅力でもあるし、この文体は無駄にあるのではなく、内容と切り離せない」とコメントしている。クライスト (山口裕之訳)：ミヒャエル・コールハース チリの地震 他一篇 (岩波文庫) 2024、283 頁。

7 Sigismund Rahmer: Heinrich von Kleist als Mensch und Dichter. G. Reimer (Berlin) 1909, S. 252-254.

## 2.2 文学界における「ロカルノの女乞食」への評価

本作は同時代の文壇からも高い評価を受けている。怪奇・幻想文学の泰斗として知られる E・T・A・ホフマンは「クライストのロカルノの女乞食は私にとって、少なくとも存在し得る限り最高の恐怖を孕んでいる。それでいて、その発明のなんと単純なことか！…クライストはただ絵具壺に筆を浸すことのみならず、その色を熟練の職工の力と独創性を以て生き生きとした絵画に仕立てることを知っているのだ、他の誰よりも。彼にとっては墓から吸血鬼を蘇らせる必要などなく、ただ老いた女乞食で事足りるのだ<sup>8</sup>」と述べ、怪奇小説でお馴染みのおどろおどろしい怪物を用いずただ無名の女乞食によって読者に最大限の恐怖を引き出して見せたクライストの手腕を絶賛した。

「ロカルノの女乞食」に関する文学的研究は主に文体分析、戯曲的構造分析といった観点から行われてきた。これらの観点に基づくと、本作は小説家であると同時に戯曲作家であるクライストのドラマ的効果を用いた作風を典型的に示しているという<sup>9</sup>。また深見茂はこれらの研究史を踏まえ、「掌編小説」Kurzgeschichte というジャンルの本質を論じる好例としてこの作品を取り上げた。深見によると、短い (kurz) こと、ないし短さは何に由来するかという問い、これは掌編小説というジャンルをその構造から本質的に捉えるためのテーマである。掌編小説としての「ロカルノの女乞食」が何故短いのか、それはこの作品を「ヨーロッパの伝統的説話文学の系譜の極致であり、最終完成体」として見るか、あるいは「実在主義的不条理文学の系譜の原点であり、その嚆矢」として見るか、このふたつの観点から説明されるという<sup>10</sup>。一方の観点、不条理文学としてこれを読む解釈からすると、女乞食の幽霊が象徴するのは人間の理解を越えた不条理な力の世界である。この力に人間たる侯爵は挑むがそれは虚空を剣で斬るような無意味な挑戦であり、結局は因果も目的もない虚無としての敗北を喫する。この虚無性こそが同作をして長々と語ることを無意味にし、短くせしめるのだという解釈が示される<sup>11</sup>。

他方の観点、説話文学の系譜として同作を位置づける解釈が本稿には重要である。こちらの解釈の要点をまとめておくと、女乞食はただの人間の乞食ではなく、みすばらしく装った神々ないし精霊である。この力ある彼岸の存在 das Jenseitige を侮辱したために侯爵は当然の報いを受けたのだということになる。老婆の正体や報復の道理については民間伝承を通して読者の中にすでに了解があるため作中で説明の必要がなく、叙述は短くて事足りるのだと深見は読む<sup>12</sup>。この解釈は深見、ラーマー<sup>13</sup>、またラインホルト・シュタイクなど他の先行研究においても、次節に述べる『グリム童話集』自注とボルテ／ポリーフカの注釈書が基になっているようである。

---

8 Heinrich von Kleists Werke. Hrsg. von Erich Schmidt. Im Verein mit Georg Minde-Vouet und Reinhold Steig. Kritisch durchgesehene und erläuterte Gesamtausgabe. Bibliographisches Institut (Leipzig), 190-, Meyers Klassiker Ausgaben, 3. Bd, S. 439.

9 深見茂：クライストの「ロカルノの女乞食」—戯曲的内容の問題に寄せて— [大阪市立大学文学会『人文研究』第12巻第2号、1961、45-63頁]、45-47頁。

10 深見茂「ドイツ近代掌編小説の基本構造-クライスト『ロカルノの女乞食』分析を中心に-」 [深見茂、栗林澄夫、平田達治編『ドイツ短編小説の変容-掌編小説の諸相-』クヴェレ会、1984、5-19頁]、5頁。

11 深見 1984、13-15頁。

12 深見 1984、7-13頁

13 Rahmer 1909, S. 254-257.

14 Reinhold Steig: Heinrich von Kleist' s Berliner Kämpfe. Berlin (Spemann) 1901, S. 523-530.



### III グリム童話「乞食ばあさん」について

#### 3.1 KHM150「乞食ばあさん」とその自注

「ロカルノの女乞食」のモチーフ分析においてしばしば類話として取り上げられるのが、グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』Kinder- und Hausmärchen (1812-57)、いわゆる『グリム童話集』の中的一篇 KHM150「乞食ばあさん」Die alte Bettelfrau<sup>15</sup>である。『子どもと家庭のメルヒェン集』は改版を重ねているが、「乞食ばあさん」は初め 1815 年の初版第 2 巻に KHM64 として収録され、1819 年の第 2 版から 1857 年の最終版まで KHM150 の位置にある。短い文章なので全文を引用する。

昔、ひとりのおばあさんがいた。お前も見たことがあるだろう、おばあさんが物乞いをするところを？ このおばあさんもそうだった、そして何かをもらったら、「あなたに神の御恵みがありますように」って言うのさ。おばあさんはドアの前に行った、そこには親切そうな若いいたずら者が火にあたって暖を取っていた。若者はおばあさんがドアの前に立って震えているので、「来なよ、おばあちゃん、あったまって行きな」こう親切に言った。おばあさんは近寄った、だけど火に近づきすぎてしまって、古いぼろきれの服が燃え始めてしまったんだ、そしてそれに気づかなかった。若者は突っ立ったままそれを見ていた、火を消してやるべきじゃなかったか？ そうだろう、消してやるべきだったろう？ もし水がなかったのなら、体中の水を涙にして両の眼から流れさせ、ふたつの快い小川が火を消すようにしてやるべきだったのだ。<sup>16</sup>

一見して明らかのように、メルヒェンと呼ぶには奇妙なテキストである。確かに『子どもと家庭のメルヒェン集』には、主人公の少女が魔法で薪に変えられ火にくべられて終わる KHM43「トゥルーデさん」のような不条理な結末の物語も含まれる。しかしこのテキストにはそもそも結末らしい結末がない。乞食のおばあさんがどうなったのか、若者はどうしたのか、語られない。この不可解さについては編者のグリム兄弟自身も注釈で述べている。

断片であり、混乱している。シュティリングの修行時代で語られていたものだが、古いメルヒェンかと思われる。乳母または母親はこの話を聞かせる時、子どもたちの前で腰を屈めてがたがた震える手に杖を持ったせむしの老婆を演じてみせるだろう。結末を欠くが、多くの伝説において入ってきた巡礼の物乞いを侮辱した者が罪を免れないように、この女乞食も呪いによって復讐したことだろう。ハインリヒ・クライストのロカルノの女乞食も参照のこと。乞食に身をやつしたオーディンがグリーンニルの名で王城の広間に入り、その衣服が燃え始めたことは刮目に値する。ひとりの若者は彼に角杯を持って行って飲ませてやり、一方もうひとりは彼を炎と炎の間に座らせた。巡礼者の神性に気づくのは遅きに失し、彼を火から遠ざけようとした時には己の剣が落ち<sup>17</sup>てきた。

15 『子どもと家庭のメルヒェン集』中のメルヒェンについては慣例に従い KHM の後に番号を付す。

16 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen herausgegeben von Heinz Rölleke. Stuttgart (Reclam) 2016, Bd. 2, S. 250.

17 a. a. O. Bd. 3, S. 224.

この自注には3つの情報が挙げられている。グリム兄弟の用いた出典がユング＝シュティリングの作品であること、クライストの「ロカルノの女乞食」が参照資料として言及されること、そして北欧神話の最高神オーディンが連想されていることである。

### 3.2 モティーフ解釈の問題

まずオーディンについて、上述のエピソードはアイスランドの古歌謡集『歌謡エッダ』(9-13世紀)の中で歌われている。「グリームニルの歌」でオーディンは正体を隠してゲイルロズという王の宮殿を訪れ、王を試した。王はグリームニルと名乗るこの怪しい男を尋問するため火と火の間に座らせた。唯一グリームニルに同情して飲み物を差し出した王の子アグナルはオーディンの祝福を受け、反対に神を怪しんで冷遇した父王ゲイルロズは自らの剣が刺さって死ぬ報いを受けたという<sup>18</sup>。

『歌謡エッダ』(または『古エッダ』)および『散文エッダ』(または『スノリのエッダ』)には世界創造・滅亡と神々や英雄の物語が古ノルド語で歌われており、北欧神話の基本資料である。グリム兄弟をはじめ、18世紀末から19世紀にかけてドイツ語圏の文人たちは北欧神話に高い関心を寄せた。特に文学や言語に携わる研究者の間で興隆したこの動きは、いわば「我々の物語」への希求である。聖書ともギリシア・ローマの古典古代とも異なるゲルマンの文化・精神のルーツとなる物語への欲求は、ナポレオンの侵攻という時代背景も伴って大きな潮流を形成していた<sup>19</sup>。

こうした潮流の旗手として活動したのがグリム兄弟である。ヤーコプとヴィルヘルムは北欧の神話が同じゲルマン語系であるドイツの神話に連なるものと捉え、喪われたドイツの神話を取り戻す手がかりとして熱心に『エッダ』の研究を行った。さらに彼らにとってはメルヒェンや伝説などの民間伝承もまた、時代が下るにつれ神話が散逸や変形を被った遺物と見なされていた。すなわち、この注釈において「乞食ばあさん」は「グリームニルの歌」にあるオーディンの神話に変形した話と解釈されており、このメルヒェンにおける乞食のおばあさんとは神オーディンないしそれに近い神的存在が姿を変えたものと示唆されているのである。

『メルヒェン百科事典』の「物乞い」Bettlerの項を参照すると、神性を有する者、高貴な者がみすぼらしく身をやつして人間を試す物語類型がグリム以外にも多数挙げられている<sup>21</sup>。見た目に騙されて冷淡な対応をした人間は罰を受け、親切な対応をした人間は報酬を受けとる。この解釈に依る限り、「乞食ばあさん」における老婆は何らかの神性を宿した存在であり、その衣服が燃えるのを見殺しにした若者は後に何らかの神罰を受けるに違いないということになる。

グリム兄弟の自注に挙げられたためか、クライストの「ロカルノの女乞食」もまた同様の解釈を受けてきた。老いた女乞食は実は神々ないしそれに準ずる存在であったので、これを粗末に扱った城主の死は自業自得であるとする解釈である。

深見はヨハネス・ボルテとイジー(ゲオルク)・ポリーフカによる『グリム兄弟の子どもと家庭のメルヒェン集注釈』Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimmを引き、神オー

18 V. G. ネッケル、H. クーン、A. ホルツマルク、J. ヘルガソン(谷口幸男訳):エッダー古代北欧歌謡集(新潮社)、昭和50、51-57頁。

19 山田仁史:新・神話学入門(朝倉書店)2017、50-58頁。

20 横道誠:グリム兄弟とその学問の後継者たち—神話に魂を奪われて—(ミネルヴァ書房)2023、174-183頁。

21 Art. Bettler. In: Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung. Hrsg. von Kurt Ranke (u.a.). Berlin (de Gruyter) 1975, S. 243-258.

ディンのみならず水の精などが類話の登場人物として挙げられることを指摘する。<sup>22</sup>『ボルテ／ポリーフカ』と呼ばれるこの注釈書は1913年から32年にかけて刊行された。グリム兄弟自身が作成した『子どもと家庭のメルヒェン集』第3巻としての注釈書を、当時最新の研究を反映して大幅に増補改訂したものである。「乞食ばあさん」の項を参照すると、大筋の内容は上掲のグリム兄弟の自注と同じだがユング＝シュティリング及びクライストの正確な作品名と全集の該当ページなど詳細情報が加筆されている。そしてグリム兄弟の自注において『エッダ』とは名指されていなかったが、オーディンのくぐりに「エッダ歌謡（本書107ページも参照）」<sup>23</sup>と追記がある。

『ボルテ／ポリーフカ』107ページはKHM136「鉄のハンス」Der Eisenhansの注釈である。「鉄のハンス」は王に捕えられた野人のハンスを解放してやった王子がハンスの力を借りて難題を解決し、最後に実はハンスが力ある王であったことが明かされて大団円となるメルヒェンである。こちらの項はグリム版に比べ数ページにわたる加筆がされ、王が「デモーニッシュな存在」<sup>24</sup>dämonische Wesenを拘束せしめるモチーフについて多数の類話が列挙される。<sup>25</sup>この中に捕えられた「海こびと」Meermännchenについてのスカンディナヴィアの伝承、熱い炉の上に縛り付けられた「水の精」Wassermannについてのチェコのメルヒェンが含まれる。

ただし、「乞食ばあさん」についてのグリム兄弟の解釈には留保が必要である。<sup>26</sup>グリムの民間伝承解釈が「神話」に重点を置きすぎるあまりしばしば牽強附会の域に及んでいることは既に度々指摘されている。<sup>27</sup>老いた女乞食をオーディンや水の精と重ねて読む根拠は火に近づいて苦しんだ（と推測される）ことと、人に侮られる外見のみである。これはヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』でも展開され、その後の神話学において過度に進められることとなる、類似点を基に次々と連想を重ねる解釈手法の典型とも言える。『メルヒェン百科事典』の「物乞い」の項も物乞いという登場人物に「宗教的意義」が付されることは認めつつ、その理由をいにしえの神話ではなく現実の物乞いがヨーロッパ社会史・文化史において有してきた位置づけに求め、貧者への援助は「キリスト教的な慈悲の義務」であるからと総括する。<sup>28</sup>これはゲルマン的精神文化のルーツをキリスト教以前の古代世界に求めようとしたグリム兄弟の解釈に一定の距離を置いた見解である。

### 3.3 典拠の問題

さらに、典拠の問題がある。自注に述べられるように、この物語はユング＝シュティリング Jung-Stilling (Johann Heinrich Jung, 1740-1817) の自伝的小説『ハインリヒ・シュティリングの修行時代』Heinrich Stillings Jünglingsjahre (1778) から抜き書きされている。不可解な文章になっているのは抜き出す過程において文脈が切り取られたことによる。

22 深見1984、8-9頁。

23 Johannes Bolte, Georg Polívka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Leipzig (Dieterich) 1932, Bd. 3. S. 207.

24 vgl. Brüder Grimm (hrsg. von Rölleke) 2016, Bd. 3, S. 211f.

25 Bolte/Polívka, Bd. 3. S. 106f.

26 『ボルテ／ポリーフカ』もまた20世紀前半の編著であり、その後進められた研究は反映されていない点も注意を要する。横道誠：神話と学問史—グリム兄弟とボルテ／ポリーフカのメルヒェン注釈 [植朗子、南郷晃子、清川祥恵編『「神話」を近現代に問う』勉誠出版2018、31-42頁]。

27 横道2023、174-188頁。

28 Enzyklopädie des Märchens, S. 246ff.

元のユング＝シュティリング作品では、この話は登場人物のひとりがたとえ話として主人公に語る。語り手は若い女性であり、主人公シュティリングに好意を寄せたものの受け入れられなかった。そこで見捨てられた自身を老いた女乞食に、如何にもやさしげに接しておきながら老婆（≡恋の炎に焦がれ死ぬ自分）を見捨てた若者に相手をたとえて責めるのである。「火を消してやるべきだっただろう」「でも水がなかった」「それならば体中の水を涙に変えてでも消してやるべきだった」この流れはシュティリングの小説における登場人物どうしの台詞をグリムが地の文に組み込んだものである。<sup>29</sup>

シュティリングがグリムの指摘する「古い民間メルヘン」からこのたとえ話を取ったか否かは定かではない。佐藤茂樹によると可能性としては否定し得ないものの、民間伝承の国際話型カタログであるアンティ・アアルネとステイス・トンプソンのインデックス（AT-type-index）にも「乞食ばあさん」の項目は掲載されておらず、シュティリングの創作とも考えられる。『メルヘン百科事典』ではKHM150を「メルヘンではなく〈洗練された作品〉だが」<sup>30</sup>とした上で、冷遇された物乞いについてのモチーフの位置づけは難しいと述べる。仮にこれが作家の創作であった場合、「乞食ばあさん」および「ロカルノの女乞食」を直接的に民間説話の系譜として読み解くことには無理筋が生じる。

ただし、その解釈の是非を問うことが本稿の主題ではない。少なくともグリム兄弟はユング＝シュティリングの記した挿話を「古い民間メルヘン」の欠片と見なしたのであり、これは当時のドイツ語圏における民間伝承をめぐる状況と密接に結びついている。作家による作品から民間伝承と思しき部分を切り出す行為、またその解釈も含めて、研究の進んだ現在の視点から断ずるのではなく、同時代の文脈の中に置いて観察することで、民間伝承研究の萌芽が興った時代の思潮を分析する材料とできるはずである。

## IV フェルディナント・グリムと「ロカルノの女乞食」

### 4.1 フェルディナント・グリムとクライストの関係について

作家による小説作品である「ロカルノの女乞食」を民間伝承として取り上げたのが、フェルディナント・グリムによる伝説・メルヘン集『ドイツおよび諸外国の民間伝説とメルヘン』*Volkssagen und Märchen der Deutschen und Ausländer* (1820)<sup>32</sup>である。「ロータル」Lotharの筆名で刊行されたこの伝承集では、第4章「イタリアの民間伝説と聖人伝」の7話目に「ロカルノの女乞食」を載せている。<sup>34</sup>

ロータル、本名フェルディナント・フィリップ・グリム *Ferdinand Philipp Grimm* (1788-1845) は

29 Steig 1901, S. 523f. 佐藤茂樹：メルヘンとそのコンテクスト：いかに生産的な読書のコンテクストを構成するか [『関東学院大学文学部紀要』第105号、2005、119-130頁]。

30 佐藤、同上、122頁。『グリム童話集』を注釈付きで刊行したハインツ・レレケはATインデックスで項目を確認し得たものについてインデックス番号を載せているが、「乞食ばあさん」には番号の記載がない。Brüder Grimm (hrsg. von Rölleke) 2016, Bd. 3, S. 471.

31 *Enzyklopädie des Märchens*, S. 247. 同書の注36も参照。

32 Lothar: *Volkssagen und Märchen der Deutschen und Ausländer*. Brockhaus (Leipzig), 1820. 以下、VMと略す。

33 刊行当時「ロータル」については知られておらず、1981年ゲルト・ホフマンの論文で初めてフェルディナント・グリムであることが明らかになった。Gerd Hoffmann: *Der Sagen- und Märchensammler »Lothar« war Ferdinand Grimm*. In: *Brüder Grimm Gedenken*. Bd. 3, Marburg 1981.

34 Lothar 1820, S. 188-194. 目次では題が省略され「女乞食」*Das Bettelweib* とのみ記される。



グリム家の兄弟のひとりであるが、「グリム兄弟」には数えられない。一般に「グリム兄弟」Brüder Grimm と言う固有名詞はグリム家の長男ヤーコプ Jacob Ludwig Karl Grimm (1785-1863) と次男ヴィルヘルム Wilhelm Carl Grimm (1786-1859) のふたりのみを指して用いられ、四男フェルディナントや他の弟妹は含まない。これはヤーコプとヴィルヘルムが協働して『グリム童話集』=『子どもと家庭のメルヒェン集』をはじめとする大きな功績を残したためであり、共編著の名義として「グリム兄弟」の名を用いたためでもある。<sup>35</sup>

偉大な兄らに比べ、フェルディナントは一家の「落ちこぼれ」であったとされる。<sup>36</sup> 心身の不調のためか自力で生計を立てることができず、生涯の多くの時期を兄からの仕送りに頼って暮らした。経済的な負担に加え、並外れて勤勉な兄らにとってフェルディナントの生活態度は見るに堪えないものであったようで、兄弟仲にも軋轢が生じていた。

一方で、あまり広く知られてはいないがフェルディナントは「グリム兄弟」の仕事に少なからぬ貢献をしている。兄弟の功績は神話学、言語学、文学など多岐にわたるが、今もなお最もその名を知らしめるのは『子どもと家庭のメルヒェン集』であり、これに連なる民間伝承蒐集・研究である。まず、ヤーコプとヴィルヘルムは青年期にアヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノの歌謡集『少年の魔法の角笛』Des Knaben Wunderhorn (1806-08) に載せる民謡 (Volklied) の蒐集に携わった。彼らは古文書を渉猟して民謡と思しき箇所を抜き書きし、アルニムとブレンターノに送った。この作業に初めはフェルディナントも協力しており、<sup>37</sup> 文献から抜き書きする手法をここで覚えたと思われる。次に、ヤーコプとヴィルヘルムは同じ手法を用いて『子どもと家庭のメルヒェン集』や『ドイツ伝説集』Deutsche Sagen (1816/18) を編纂する。フェルディナントもまた伝承テキストの蒐集を続け、兄弟のメルヒェン集・伝説集にもフェルディナントが提供したテキストが含まれる。<sup>38</sup> さらにヤーコプの初期論文『古ドイツの職匠歌について』(1811) にもフェルディナントの蒐集した資料は活用され、協力者として献辞に名が挙がっている。<sup>39</sup>

兄弟への協力に加え、フェルディナント自身もまた伝承集を3冊刊行した。但し兄らとの軋轢のためか、全て筆名による。このうち最も早い『ドイツおよび諸外国の民間伝説とメルヒェン』は1820年、フェルディナントがベルリンの出版社ゲオルク・ライマー社に勤務中の頃に出た。ライマー社は『子どもと家庭のメルヒェン集』初版と第2版を刊行した出版社で<sup>40</sup> グリム兄弟と交流があり、フェルディナントも兄ヤーコプの口利きでここに校正・校閲の職を得た。

フェルディナントはライマー社勤務時代、クライスト作品の刊行に携わっていた。出版前の原稿に触れて感激し、兄弟に手紙を書き送っている。弟ルートヴィヒ・エーミール・グリム Ludwig Emil

35 ヤーコプとヴィルヘルムの協働関係については横道誠：グリム兄弟とその学問的後継者たち—神話に魂を奪われて—(ミネルヴァ書房) 2023、特に第2章「兄と弟の魂が共鳴する？」を参照。

36 フェルディナントの生涯について詳しくは拙論を参照。馬場綾香：フェルディナント・グリムの生涯と仕事について [神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート『年報 Promis』Vol.2、2024、65-81頁]。

37 Ferdinand Philip Grimm (Aus dem Nachlaß hrsg. von Gerd Hoffmann und Heinz Rölleke): Der unbekannte Bruder Grimm. Deutsche Sagen von Ferdinand Philipp Grimm. Düsseldorf/Köln (Diederichs) 1979, S. 11f.

38 KHM80「めんどりの死のこと Von dem Tode des Hühnchens」とKHM109「経帷子 Das Todenhemdchen」はフェルディナントの提供による。Brüder Grimm (hrsg. von Rölleke) 2016, Bd. 3, S. 445f, 457. Heiner Boehncke, Hans Sarkowicz: Der fremde Ferdinand. Märchen und Sagen des unbekanntenen Grimm-Bruders. AB - Die Andere Bibliothek. 2020, S. 373f.

39 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 12.

40 第3版以降はゲッティンゲンのディーテリヒ社から刊行される。横道 2023、166頁。

Grimm (1790-1863) の回顧によると生前のフェルディナントは読書や観劇を日々旺盛に行いながらほとんど常に辛口の批評家であったが、クライストに関しては珍しくも手放しに称賛していたようである。

フェルディナントが自身の伝承集にクライストのテキストを取り入れるにあたり、クライスト作品への高い評価は無意識的にしろ影響を及ぼした可能性はある。しかしそれだけではない。「ロカルノの女乞食」を収録したことは民間伝承というものに対するフェルディナントの理念を表していると考えられる。

## 4.2 文体と典拠の問題

形式・出自のいずれにおいても「ロカルノの女乞食」は民間伝承と呼び得るものではない。まず形式について、前節で述べたように、クライストの文章は複合文を多用した長文を特徴とする。一文が長いペリオドを区切りとして数えると「ロカルノの女乞食」は全段通して20文にも満たない。これは伝承文学の口承文芸としての側面を考慮すると相応しいとは言えない特徴である。グリム兄弟とその時代の民間伝承蒐集・研究者にとって、「口承の」*mündlich* という言葉は彼らの理想とする民間伝承の在り方を端的に示す語であった<sup>41</sup>。民間の、すなわちフォルク (*Volk*= 民衆/民族)<sup>42</sup> の伝承を集め保存しようとしたグリム兄弟にとって、究極的には非識字層の民衆が文字を用いず口頭伝承のみによって伝えてきた伝承こそが真に純粋な民間伝承と見なされる。この基準に照らすと、人間の一般的な記憶能力に鑑みて複合文などを多用した複雑かつ長い文章は適さないことになる。

それでは、『子どもと家庭のメルヘン集』が「乞食ばあさん」で行ったような文体の編集が加えられているのではないか。これは否である。文章を見比べたところ、フェルディナント版ではクライスト版に読点 (コンマ) が複数箇所書き足されているのみで、複合文を単純な文に切り分ける操作や間接引用文を直接引用文に書きかえるなどの加工は一切施されていなかった。微細なつづりの修正は見られるものの、口語体らしくするための語句の置き換えなどもない。フェルディナントはクライストの文章をほぼそのまま収録したのである。この点は初めての編著書としてフェルディナントの不慣れな手つきの表れとも言え、ゲルト・ホフマンの分析によると次の伝承集『ドイツの民間伝説』*Volkssagen der Deutschen* (1838) では文体の統一を図りテキストの加工が進められているという<sup>43</sup>。

次に出自について、先述のようにクライストは知人から聞いた体験談を基にこの作品を執筆したとされる。また、ヘルムート・ゼンプトナー編集による全集はクライストが参照した可能性のある先行作品を挙げている。『正直者、あるいは教養を持ち公平な読者のための娯楽誌』*Der Freimüthige oder Unterhaltungsblatt für gebildete, unbefangene Leser* に1810年に掲載されたハインリヒ・クラウレンの「灰色の部屋」*Die graue Stube* である<sup>44</sup>。しかし「灰色の部屋」もまたクラウレンという作家によ

41 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 29f.

42 Helge Gerndt: Sagen und Sagenforschung im Spannungsfeld von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. In: *Fabula*, 29. Band (1988) Sonderheft, S. 1-20.

43 フォルク概念は18世紀末から19世紀にかけて、従来侮蔑的に用いられた下層民 (≡ *Pöbel*) の意味を脱却し、近代的・都会的教養に毒されていないが故に理想的国民の礎となり得る純朴な民衆といった肯定的概念へと変容を被った。須藤秀平: 視る民、読む民、裁く民—ロマン主義時代におけるもうひとつのフォルク (松籟社) 2019, 11-16 頁。

44 Hoffmann 1981, S. 440.

45 Heinrich von Kleist. *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Helmut Sembdner. 4. Revidierte Aufl. München (Carl Hanser) 1965, S. 906.

る大衆小説であり、民間伝承と定義されるものではない。<sup>46</sup>

なお、同じくクライスト作品として知られる「ミヒャエル・コールハース」Michael Kohlhaas の題もまたフェルディナントの伝承集第1章「ドイツの民間伝説」に見えている。ただしこちらは「ロカルノの女乞食」と異なり、クライストからの転載ではない。16世紀の実在した人物ハンス・コールハーゼにまつわる訴訟事件を題材にしたこの話は、フェルディナントとクライストがどちらも『オーバーザクセンおよび隣接諸国の歴史に関する原文準拠にして精確な補遺集』Diplomatische und curieuse Nachlese zur Historie von Obersachsen und angrenzenden Ländern (1731)をはじめとする共通の資料を利用したものと見られている。<sup>47</sup>

クライストの「ミヒャエル・コールハース—古い年代記より—」[HK, S. 58-155]はまず1808年に自身の編集する文芸誌『フェーブス』Phöbusに前編のみが掲載され、1810年の作品集に加筆修正された全編が収録された。全編は当時の判型で215ページあり、実際の事件を基にしつつも作家の手でエピソードや描写を膨らませた小説である。これに対しフェルディナントの載せたテキストは出来事のみ記述で3ページに収まっており[VM, S. 58-60]、クライスト版ではなく年代記などの資料を基にした文章と思われる。無論、フェルディナントは先述の通りライマー社での業務においてクライストの作品集刊行に携わっていたことから、「ミヒャエル・コールハース」も1808年『フェーブス』版と1810年作品集版の両方を知っていたはずである。このことからフェルディナントは伝承集収録にあたり同じ題材でもテキストの取捨選択を行っており、ただ好みの作家の作品を取り入れたわけではないことが分かる。ヤーコプとヴィルヘルムは「ロカルノの女乞食」の存在を知った上でユング＝シュティリングからの抜き書きを選び、一方フェルディナントは敢えてクライストを選んだのである。

これはクライストとユング＝シュティリング、どちらの作家をより高く買っていたかという点からは説明し得ない。ヘルムート・ゼンプトナーが明らかにしたところによると、ヤーコプとヴィルヘルムもまたフェルディナント同様クライストを高く評価していた。ライマー社勤務中のフェルディナントからクライストの作品出版の知らせを受けて期待を寄せていたこと、クライスト編集の『ベルリント刊新聞』<sup>48</sup>を予約購読しスクラップを保存していたこと、またヴィルヘルムは表立って名前を出していないものの作品集に対して称賛の書評を書いていたことが指摘されている。<sup>49</sup>加えて、アルニムからの苦言を受けて改版の際に削除されたものではあるが、『子どもと家庭のメルヒェン集』初版に収録されていたメルヒェンKHM22「子どもたちが屠殺ごっこをした話 Wie Kinder Schlachtens miteinander gespielt haben」は『ベルリント刊新聞』から取られている。<sup>50</sup>

### 4.3 ジャンルの問題と「神話」意識について

「ロカルノの女乞食」と「乞食ばあさん」、この選択の違いは出典よりも、両者の内容の違いから説明されなければならない。フェルディナントが「ロカルノの女乞食」を選んだ理由はその「伝説」ら

46 識名章喜：古城の幽霊をめぐる文学誌：クラウレン、アーペル、クライスト、フケー夫妻 [慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第121号(1)、2021、1-23頁]。

47 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 270ff.

48 『ベルリント刊新聞』はジャーナリストとしてのクライストによる日刊紙で、発刊当初は時事的なニュースを掲載し好評を得たが、半年ほどで廃刊した。「ロカルノの女乞食」はその日の全6ページ中4ページを割いて掲載されており、ニュース記事の穴を埋める役割もあったかと推定されている。深見1984、15-16ページ。

49 Helmut Sembdner: In Sachen Kleist. Beiträge zur Forschung. Carl Hanser (München) 1974, S. 227-246.

50 Sembdner 1974, S. 243.

しさにあったのではないかと考えられる。ここには兄らとは異なるフェルディナントの民間伝承に対する理念が表れている。

フェルディナントが何故「ロカルノの女乞食」を選んだか、それは題名が表す如く「ロカルノの」物語であったことに由来するのではないか。この物語の冒頭を以下に示す。上がフェルディナントのテキスト、下がクライストのテキストである。コンマとセミコロンの使用を除いて内容に差異はないので日本語訳はフェルディナント版から訳出する。

Am Fuße der Alpen, bei Lokarno im obern Italien, befand sich ein altes, einem Marchese gehöriges Schloß, das man jetzt, wenn man vom St. Gotthard kommt, in Schutt und Trümmern liegen sieht; ein Schloß mit hohen, weitläufigen Zimmern, in deren einem einst, auf Stroh, das man ihr unterschüttete, eine alte kranke Frau, die sich bettelnd vor der Thüre eingefunden hatte, von der Hausfrau aus Mitleiden gebettet worden war. [VM, S. 188]

Am Fuße der Alpen bei Lokarno im obern Italien befand sich ein altes, einem Marchese gehöriges Schloß, das man jetzt, wenn man vom St. Gotthard kommt, in Schutt und Trümmern liegen sieht: ein Schloß mit hohen und weitläufigen Zimmern, in deren einem einst auf Stroh, das man ihr unterschüttete, eine alte kranke Frau, die sich bettelnd vor der Thür eingefunden hatte, von der Hausfrau aus Mitleiden gebettet worden war. [HK, S. 190]<sup>51</sup>

アルプスの麓、北イタリアのロカルノの側に、ある侯爵の持つ城があって、今でもザンクト・ゴットハルト峠の方からそちらに行くと瓦礫と廃墟の中に城が横たわっているのが目に入る一城には天井の高い広い部屋があり、そこにはかつて、ひとりの病身の老女が、彼女のために延べられた敷き藁の上に横になっていたのだが、この老女は物乞いをしにドアの前に現れ、城の夫人から同情のために寝床を用意されたのである。

物語の冒頭は、まず舞台となる場の提示から始まる。実在する具体的地名、古城の存在、そして「今でも」jetzt 廃墟ではあるものの城跡を見ることができるという情報が示される。これらの情報はフェルディナントにとって重要項目であったと思われる。ハインツ・レレケはフェルディナントのテキストとその原典となった口承テキストの比較分析を行い、「伝説の場所が始めに明示され、これにより土地固有のものへの関心 lokalspezifisches Interesse を巧みに喚起する」<sup>52</sup>という編集が加えられていることを指摘した。フェルディナントは、元のテキストに地名がない場合にはこれを文章の冒頭に書き加え、「ロカルノの女乞食」のように地名が記載されているテキストはそのまま採用したものと考えられる。

この方針の動機は『ドイツおよび諸外国の民間伝説とメルヘン』の書名と章題から読み取ることができる。7章と補遺からなる章構成の各章題を示すと次のようになる。<sup>53</sup>

51 『ベルリント刊新聞』(1810)版と作品集(1811)版でこの引用箇所に変更はない。

52 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 17.

53 同書の見本を見せられたヤーコブとヴィルヘルムはそれぞれ、「本物の外国の典拠をきちんと自分自身で確認したのか」「書物から抜き出した伝説に関して必要な見通しが欠けている」と厳しい評価を返した。イタリアの伝説に



- 1章 ドイツの民間伝説
- 2章 オランダの民間伝説
- 3章 デンマーク、スウェーデン、イングランド、スコットランドの民間伝説
- 4章 イタリアの民間伝説と聖人伝
- 5章 フランスの民間伝説
- 6章 スペインの民間伝説
- 7章 ロシアとポーランドの民間伝説
- 補遺

1～3章、5～7章の題はすべて「民間伝説」Volkssagen であるのに対し、4章のイタリアだけに「聖人伝」Legende と添えられている。これはフェルディナントが伝承文学のジャンルを意識していたことを表している。英語の legend と異なり、ドイツ語の Legende はキリスト教の聖人・聖女にまつわる物語を指す。カトリックの中心地ローマ<sup>54</sup>を有するこの地域の章には教皇や聖女、教会といったモチーフが多く含まれており、世俗の伝承とは異なるカテゴリとして章題に載せたものと考えられる。

伝承文学におけるジャンル論は『ドイツ伝説集』第1巻の序文においてヤーコプ・グリムが「伝説」Sage と「メルヒェン」Märchen を区別したことに始まるとされる<sup>55</sup>。民間伝承が学術的関心の対象となる以前、伝説、メルヒェン、また「寓話」Fabel などの言葉に厳密な使い分けはなく、いずれも単に（信じるに値しない）「お話」程度の意味に用いられていた<sup>56</sup>。これらを仕分けしたヤーコプの文章は下記のようなものである。

メルヒェンはより詩的 poetisch であり、伝説はより史的 historisch である。メルヒェンはそれ自体でしっかりと立っており、自身の中で花を咲かせ完結する。伝説は、色彩の豊かさは劣るが、以下のような特性を具えている。伝説はよく知られているもの、よく理解されているものに結びつく。それはある場所であり、ないしは歴史上の有名な名前である。（中略）伝説はフォルクにとって、与えられた証明書によって十分に証明されている。つまりその証明書が否定すべくもない身近で確かな実在であるために、それに結びついた不思議への疑いを凌駕するのである。<sup>57</sup>

ここで言う「伝説は史的である」とは、伝説が史実であることを意味しない。歴史学的に事実とは呼び得ない物語、それでいてそうした学知的営為とは無縁のフォルクには「ほんとうにあった話」と信じられ得る物語、それが伝説と定義される。そしてその「証明書」とは、目に見える実際の土地や実在した人名に紐づけられることなのである。メルヒェンは常にいつか、どこか、の出来事であり歴

---

クライストのドイツ語で書かれたテキストを用いたこと、諸外国と銘打ちつつ各章の分量に偏りがあることなどが指摘されていると思われる。Hoffmann/Rölleke 1979, S. 13f.

54 ローマにまつわるテキストは4章の全24話中4話である。

55 Art. Gattungsprobleme. In: Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung. Hrsg. von Kurt Ranke. Berlin/New York (de Gruyter) 5 Band (1987) S. 744-769, Hier S. 746.

56 Gerndt 1988, S. 4f. ハイント・レレケ（小澤俊夫訳）：グリム兄弟のメルヒェン（岩波書店）1990、6-11頁。

57 Brüder Grimm (ediert und kommentiert von Heinz Rölleke): Deutsche Sagen. Ausgabe auf der Grundlage der 1. Aufl. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1994, S. 11ff.

史上の特定の時空間に位置づけられない。これに対して伝説は特定の時代、特定の場所を要求する。

このように兄が論じた定義を、フェルディナントも意識していたであろう。その証左として、いくつかのテキストに添えられた「メルヒェン」という副題がある。確認したところ大半のテキストには上述のように冒頭に地名の提示があり、一方「メルヒェン」と書かれたテキストは場所や時代の明示がなく「昔、あるところにひとりの王様がいました」[VM, S. 13]「何年も昔のこと、ひとりの男がいました」[VM, S. 37]などの抽象的な書き出しで始まっていた。

章題と全体の分量比から見て、同書は伝説を主眼とし、補完的にメルヒェンと聖人伝を加えたものと見ることができる。このため同じ「女乞食」モチーフであっても時代や地域の特特定されないメルヒェン「乞食ばあさん」では不十分であり、ロカルノという地名に結びつく伝説「ロカルノの女乞食」でなければならなかったのではないだろうか。

#### IV おわりに

「ロカルノの女乞食」ないし「乞食ばあさん」への取り扱いは、グリム兄弟とフェルディナントにとって「伝承文学」とは何か、どうあるべきかという態度の問題と深く関わっている。

『子どもと家庭のメルヒェン集』が今もなお世界的に高い評価を受け研究され続けているのに対し、フェルディナントの編著作は殆どその存在を看過されてきた。しかし「ロカルノの女乞食」と「乞食ばあさん」の例に明らかなように、両者の伝承テキストの扱い方に大きな差があったわけではない。確にかつて「グリムのメルヒェン」は初めてフォルクのメルヒェンを記録・保存した画期的業績とされていた。ところがその後の研究の進展により聴取元がグリム自身の標榜したような素朴な農村のフォルクではなかったこと、聞き取りによらず文献を出典とする場合もあり、そのテキストも彼らの基準に基づき民間伝承らしく「適切な」文章になるよう改変が施されていたことなどが判明する<sup>58</sup>。民間伝承に関する学術的資料として企図された『子どもと家庭のメルヒェン集』には注釈書である第3巻が出ているが、本人の病没によって叶わなかったもののフェルディナントも同様に出典などを記した続巻を計画していた<sup>59</sup>。

19世紀前半という時代は学術的研究対象としての民間伝承に関心が寄せられ始めた黎明期であり、対象の定義もあるべき調査方法も資料の取り扱いについても模索途中であった。小説を切り抜いて民間伝承と呼ぶことも、現在では咎められるであろうが、当時はグリム兄弟を筆頭に行われていたのである。むしろ理念上は「忠実に」伝承テキストを保存しようとしたグリム兄弟とは逆に、詩人の文才によってテキストを自在に改変すべきと主張する声も強かった<sup>60</sup>。

『子どもと家庭のメルヒェン集』の商業的成功とは裏腹に、グリム兄弟自身の本来の意図は民間伝承の学術的資料の刊行であった。これに対し、フェルディナントは同じく学術性を念頭に置きつつも、一般読者に受け入れられることを望んでいた。これは2作目の伝説集『ドイツの民間伝説』序文冒頭の「まず何よりも、ドイツの川辺や草地を巡る旅人の伴として」という文言に表れている<sup>61</sup>。フェルディ

58 レレケ（小澤訳）1990。横道 2023、146-157 頁。

59 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 13.

60 伝承テキストへの「忠実さ」をめぐるグリムとアルニムの論争について、横道 2023、151-157 頁、須藤 2019、143-150 頁。

61 Philipp von Steinau: Volkssagen der Deutschen. Zeit (Julius Schieferdecker) 1838, S. III.

ナントは伝説に想いを馳せながら各地を旅行するような楽しみ方を想定していた。こうした楽しみのためには定義上メルヘンよりも伝説でなければならなかった。この定義はフェルディナントの兄が示した学術的定義であり、しかしながらその活用法は兄らの示した学術的意図とは異なる。フェルディナントが「ロカルノの女乞食」を収録したことはこの二義性を表しており、黎明期の民間伝承研究が有していた浮動性そのものとも言えよう。

## 参考文献

- Lothar: Volkssagen und Märchen der Deutschen und Ausländer. Leipzig (Brockhaus) 1820.
- Heinrich von Kleists sämtliche Werke. Vierter Teil. Erzählungen. Vermischte Schriften. Hrsg. von Theophil Zolling. Deutsche National-Litteratur. Historisch-kritische Ausgabe. 150. Band. 2. Abteilung. Tokyo (Sansyusya) 1974.
- Johannes Bolte und Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Leipzig (Dieterich) 1913.
- Helge Gerndt: Sagen und Sagenforschung im Spannungsfeld von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. In: Fabula, 29. Band (1988) Sonderheft, S. 1-20.
- Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen herausgegeben von Heinz Rölleke. Stuttgart (Reclam) 2016.
- Brüder Grimm (ediert und kommentiert von Heinz Rölleke): Deutsche Sagen. Ausgabe auf der Grundlage der 1. Aufl. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1994.
- Ferdinand Philip Grimm (Aus dem Nachlaß hrsg. von Gerd Hoffmann und Heinz Rölleke): Der unbekannte Bruder Grimm. Deutsche Sagen von Ferdinand Philipp Grimm. Düsseldorf/Köln (Diederichs) 1979.
- Heiner Boehncke, Hans Sarkowicz: Der fremde Ferdinand. Märchen und Sagen des unbekanntenen Grimm-Bruders. Berlin (Die Andere Bibliothek) 2020.
- Gerd Hoffmann: Der Sagen- und Märchensammler »Lothar« war Ferdinand Grimm. In: Brüder Grimm Gedenken. Bd. 3, Marburg 1981.
- Sigismund Rahmer: Heinrich von Kleist als Mensch und Dichter. Berlin (Reimer) 1909.
- Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung. Hrsg. von Kurt Ranke. Berlin/New York (de Gruyter) 1975-.
- Reinhold Steig: Heinrich von Kleist's Berliner Kämpfe. Berlin (Spemann) 1901.
- Heinrich von Kleist. Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. von Helmut Sembdner. 4. revidierte Aufl. München (Carl Hanser) 1965.
- Helmut Sembdner: In Sachen Kleist. Beiträge zur Forschung. München (Carl Hanser) 1974.
- 佐藤茂樹：メルヘンとそのコンテクスト：いかに生産的な読書のコンテクストを構成するか [『関東学院大学文学部紀要』第105号、2005、119-130頁]。
- 識名章喜：古城の幽霊をめぐる文学誌：クラウレン、アーペル、クライスト、フケー夫妻 [慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第121号(1)、2021、1-23頁]。
- 須藤秀平：視る民、読む民、裁く民—ロマン主義時代におけるもうひとつのフォルク（松籟社）

2019。

精園修三：ハインリヒ・フォン・クライストの「ロカルノの女乞食」：解釈試論 [信州大学教養部『信州大学教養部紀要』第14号、1980、105-114頁]。

V.G. ネッケル、H. クーン、A. ホルツマルク、J. ヘルガソン編（谷口幸男訳）：エッダ：古代北欧歌謡集（新潮社）1973。

深見茂：クライストの「ロカルノの女乞食」：戯曲的内容の問題に寄せて [大阪市立大学文学会『人文研究』第12号(2)、1961、110-129頁]。

深見茂他編：ドイツ短編小説の変容—掌編小説の諸相（クヴェレ会）1984。

山田仁史：新・神話学入門（朝倉書店）2017。

横道誠：グリム兄弟とその学問的後継者たち—神話に魂を奪われて—（ミネルヴァ書房）2023。